

祝福の風も異世界から
くるそうですよ？

迅雷の戦斧

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

愛する主と家族を守るため空に消えていったリインフォース・アインス。しかし、二度と開かないはずの目を開けたとき、そこは今まで見たことない異世界だった。

今、荒廃した“ノーネーム”に祝福の風が吹き抜ける・・・。

目次

祝福の風、再び	1
黒ウサギのO☆HAN☆A☆SHI回※	
ただの説明会です	9
不屈の心	18
ウサギの願い、夜天の祝福	29
千の瞳と、白き夜叉	40
白夜と夜天	50
魔王の爪痕※アインスの設定説明あり	60
王の資格	68
名前を呼んで	81

祝福の風、再び

優しい主に見送られた彼女が次に見たのは、完全無欠の異世界だった。

「・・・は!?」

あまりの出来事に彼女——リインフォース・アインスは、普段の彼女らしからぬまぬけな声を出した。

(い、一体どういうことだ!? 何故、私はまだ生きている・・・!?)

アインスは、この世から消滅したはずの自分が何故このような場所にいるか理解できなかつた。

アインスはかつて「夜天の書」と呼ばれる。魔法書の管制プログラムだった。しかし、長い歴史の中で改造され続けいつしか「闇の書」と呼ばれる存在となった。闇の書は本来ただの白紙の本なのだが、魔法生物や魔道師から魔力を蒐集することによりページが追加されていき、666ページ溜ったとき完全に起動するのだ。完全に起動した闇の書はまず自身の保有者である人間を取り込み、その後世界を滅ぼすまで暴れ続ける。そのあまりの強さゆえ、止めることは容易ではなく、また運よく止めることができてもしそれで闇の書は終わらない。闇の書には無限転生機能というものがあり、闇の書が破壊され

る、もしくはその保有者が死んだときページを0にして新たな主になる人間を求め次元世界を超え、行方をくらましてしまうのだ。そうして転生を繰り返し、たどりついたある世界で闇の書はある少女を主とする。

八神はやて

それが少女の名前だった。その少女は9歳ながらかなり過酷な人生をおくっていた。物心ついたころにはすでに両親は事故で他界、頼れる親戚はなく唯一父の親戚だというギル・グレアムから生活費が送られてくるものの、あったことはなかった。さらに原因不明の病（実際は闇の書のせい）によって、足が動かず車いすによる生活を余儀なくされた。そのせいで彼女は学校にも行けず、病院に行く時以外は自宅と図書館を行き来する生活を続けていた。そして6月4日——彼女の誕生日に闇の書は第一の覚醒をはたした。それにより、闇の書の守護騎士プログラムが起動、「雲の騎士団」ヴォルケンリッターが召喚された。だがしかし、はやてはボルケンリッターを人間として扱い家族として迎え入れた。今までは考えられなかった対応に、ヴォルケンリッター達は最初は困惑したが、はやての優しい心に触れ、次第に人間らしさを手に入れていく。

だが、そんな生活は長くは続かなかつた。

闇の書によるはやてへの浸食が進み、命の危機にひんしていたのだ。それに気づいたヴォルケンリッター達は、はやての「他人に迷惑をかけるのはアカン」という言いつけを無視し、蒐集を開始した。闇の書のバグにより完成した時のことを覚えていないヴォルケンリッター達はそれがはやてを助ける唯一の道だと信じていた。それが、はやてをさらに苦しめることになるとは思わずに・・・。

そして12月24日——絶望が始まった。

遂に完成してしまった闇の書ははやてとヴォルケンリッター達を取り込み暴走を始めた。現地に居合わせた魔道師達による戦闘が行われたがその圧倒的な戦闘力に苦戦を強いられていた。そんな中、はやては闇の書の内部で夢を見ていた。それはとても幸福な夢だった。しかしはやては、その「幸福な悪夢」ではなく「つらい現実^{幸せ}」を望んだ。そして今度こそ闇の書の悪夢を終わらせるために、その管制人格である女性に名前を付けた。

祝福の風、リインフォースと。

そうして「闇の書」は「夜天の書」に戻った。その時、夜天の書から闇の書の防衛プログラムであり「闇の書の闇」と呼ばれた存在——ナハトヴァールが分離した。夜天の書から分離したナハトヴァールは暴走を始めるが、はやてとボルケンリッター達、そして他の魔道師達の協力により防衛プログラムを完全に破壊した。これで夜天の

書は完全に戻り最高のハッピーエンドを迎えた。

そう、ここで話が終わればそうだったのだろう。

夜天の書の内部には、まだ防衛プログラムの残骸が残っていたのだ。このままでは、夜天の書は再び闇の書に戻ってしまう。それを防ぐためにはリインフォースが消えるしかなかった。そして彼女は、主であるはやての制止をふりきり、信頼できる二人の魔道師——「高町なのは」と「フェイト・テストアロッサ」により、多くの人たちに見送られ空へときえていった。はやてやヴォルケンリッター達の幸せを祈って……。

だというのに、彼女は生きていた。

そりや、彼女も混乱するだろう。さつきまで消滅して空へ昇っていたというのに、いま彼女は四千メートル上空からスカイダイビングを行っていた。無論、パラシュートなどはない。下に湖が見えるがこの高さでは助からない。

（仕方がない。わからないことが多いが今はとりあえず飛行魔法を「ギニャアアアアアアアアアアア!!」……って、な!?）

わからないことが多すぎるのでひとまず飛行魔法で下に降りようとしたとき、突如自分のさらに上から猫の鳴き（叫び?）声か聞こえ上を向くと、三人の少年少女が落ちてきていた。

一人は、学生服を着た不良のような少年。

一人は、少し時代遅れのドレスを着たお嬢様のような少女。

一人は、ラフな格好をして猫を抱えている少女。

三人のうち、少女二人は困惑しており、少年は楽しそうに笑っていた。アインスは、この状況で笑っている少年を少しいぶかしんだが、すぐに冷静に考える。

(まずいな．．．、彼女たちには魔力が感じられない．．．。)

自分と同じように落ちている三人ではあるが、魔力を一切感じなかった。それはつまり、三人は自分のように飛行魔法が使えないということ。このまま落ちれば、三人は簡単にミンチと化すだろう。そしてそれを見て見ぬ振りできるほど、アインスは非道ではなかった。むしろ、積極的に助けようとした。そして彼女は．．．

「．．．へぷっ！」

三人を、文字通り受け止めた。

「「．．．へ？」」

落ちてきていた三人はそろって声を出した。自分たちの下を誰かが落ちているのもちろん気づいていた。でもまさか、受け止めるとは思わなかった。しかも三人同時に。そんなことを思われていたアインスは、

(お、重い．．．。)

かなりピンチだった。いくらアインスとはいえ、三人十一匹を受け止めて、あまつさ

え空を飛ぶなど不可能に近かった。

バツシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアン!!

結果、アインスは三人とともに下の湖に落ちていた。とわいえ、落ちている最中に緩衝材のようなものを突き抜けてきたので怪我はなかったが。これがあれば三人は無事降りられたかもしれないが、たとえばアインスが緩衝材に気づいていてもきつと受け止めていただろう。

「ぶはっ!」

湖から顔を出したアインスは周囲を見渡した。周囲は一面森であり、湖の岸にはすでに先ほどの三人が上がっていた。アインスもすぐに岸に上がる。

「し、信じられないわ! 呼び出しておいていきなり空へ放り出すなんて!」

「右に同じだクソツタレ。これなら岩の中に呼び出されたほうがまだマシだぜ。」

「・・・いえ、岩の中に呼び出されたら出られないでしょう?」

「俺は問題ない。」

「そう、身勝手ね。」

お嬢様のような少女の叫びに、不良のような少年が答え、軽くコントをしていた。

「大丈夫・・・?」

岸に上がり服を軽く絞っていたアインスに、猫を抱えた少女が声を掛けてきた。

「ん？ああ、大丈夫だ。」

「そっか……。さつきは助けようとしてくれてありがとう。」

「気にしないでくれ。実際は何もできずに落ちてしまったのだからね。」

「それでも、ありがとう。」

「……。どういたしまして。」

少女は何度もお礼を言ってくるので、アインスは素直に受けることにする。そうしているとき少年が声を出した。

「一応確認しておくが、オマエたちにもあの妙な手紙が？」

(手紙?)

少年の言葉にアインスは内心首をかしげた。手紙などアインスは知らないし、そもそも手紙など貰ったこともない。だが、そうなのはアインスだけのようで他の三人は話を進めていく。

「そうだけど……。まずそのオマエというのをやめてくれないかしら？私には“久遠飛鳥”という名前があるの。そこの猫を抱えたあなたは？」

“春日部耀”、よろしく。」

「そう、よろしく春日部さん。そして、そこの凶暴そうなあなたは？」

「高圧的な自己紹介ありがとう。見ての通り、粗野で、凶暴で、快樂主義者と三拍子そ

ろつたダメ人間の“逆廻十六夜”です。用法と用量を守つたうえ、適切な態度で接してくれ、お嬢様？」

「そう、取扱説明書をくれたら考えてあげるわ。」

「マジか。今度作つてくるから、覚悟しとけよ？・・・っと、それと・・・」

そして少年——逆廻十六夜はアインスのほうを向いた。

「さつき、俺たちを受け止めようとしたオマエは？」

「私か？私はリインフォース・アインス。好きなように呼んでくれ。」

「わかつたぜ、アインス。それと一応礼を言っておくぜ、ありがとうな。」

「わたしも、さつきはありがとう、アインスさん」

「あ、ああ。」

十六夜と飛鳥の二人にお礼を言われ、照れたように頬を掻きながら答えたアインス。

そんなアインスを見て「ヤハハ」と楽しそうに笑う十六夜。

ほほえましそうにアインスを見てクスクス笑う飛鳥。

そんな三人を腕の中の猫をなでながら無表情で眺める耀

(うわー・・・、呼び出したお三人様は問題児っぽいですし、あちらの女性はそもそも

呼び出しておりませんし、先が思いやられるのですよ・・・)。

そしてそんな四人を草むらの中から観察し、早くも頭を抱えなくなった少女がいた。

黒ウサギのO☆H A☆N A☆S H I回※ただの説明会で す

「で、呼び出されたのはいいが、なんで誰もいないんだ？」

自己紹介が終わるなり、十六夜は周囲を見ながら言った。

「こういうときは、この箱庭の世界について説明するヤツがいるもんじゃねえのか？」

「そうね、このままでは動きようがないものね。」

「・・・この状況で慌てないのもどうかと思うけど。」

（まったくもってその通りですが、あなたも人のことは言えないのですよ？）

と、問題児三人（+草むらの中の一人）がこのようなやり取りをしているなか、アイ
ンスはというと。

（なるほど・・・、この世界は“箱庭”というのか・・・。）

現状把握に努めていた。先ほどまで話を聞く限り、自分以外の三人は手紙を受け取っ
てこの世界に来たという。箱庭という名はその手紙の中に書いてあったのだろう。し
かし、箱庭などという名前の次元世界は聞いたこともない。考えられるのは、時空管理
局がまだ発見していない次元世界、もしくは時空管理局が干渉できない平行世界である

かのどちらかだろう。他の三人も説明する人を待っているのなら、あまりこの世界の情報に手に入らないだろう。

「仕方ねえ。ならそこに隠れてるヤツに話でも聞くか？」

十六夜の声に思考の海から脱すると、彼は草むらのある一点を見ていた。

「あら、あなたも気づいていたの？」

「当然、かくれんぼじゃ負けなしだぜ。そっちの二人も気づいてたんだろ？」

「・・・風上にいられたら嫌でもわかる。」

「空から落ちてくるときから気づいてたが、敵意を感じなかったからほおっておいたんだが・・・まずかったか？」

「いや、別に問題ねえよ。にしても、オマエら面白いな。」

アインス達を見ながら、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた十六夜。だがすぐに視線を先ほどの草むらの方に向ける。アインスたちもそれにならうように草むらへ目を向けたところで、草むらから一人の少女が両手を上げて歩み出てきた。その少女は少し露出の多い服装だったが普通の少女だった。

・・・頭からウサ耳さえ生えてなければ。

「い、イヤだなー、四人様方。そのような鋭い視線を向けられたら黒ウサギの脆弱な心では受け止めきれず死んでしまいますよ？古来より寂しさと狼はウサギの天敵ともう

しますし、ここはひとつ話し合いで解決いたしませんか？」

「断る。」

「却下。」

「お断りします。」

「いや、話しくらい聞いてやったらどうだ？」

「アハ、取りつくシマもないですね♪それと、その銀髪の方、ありがとうございます！」

バンザイーと降参してから、アインスの方を向いて頭を下げる黒ウサギ。しかし、頭の中では目の前の四人を値踏みしていた。

（肝っ玉は及第点。ここでNOといえるのは評価にあたいします。少し扱いにくいのが難点ですが……。それに、もう一方もそれなりに実力もあるようですし、ここはぜひとも私達のコミュニティーに入っていたかなければ……。！）

しかし、黒ウサギは自分の思考に没頭するあまり目の前の人物が三人しかいないことに気が付かなかつた。そして、いなくなった一人——春日部耀はというと、

「えいつ！」

「フギヤ!?!」

黒ウサギの背後から思いつきりウサ耳を引っ張っていた。黒ウサギの口からは、女性

らしからぬ悲鳴が聞こえた。

「ち、ちよつと待って下さい！触るだけなら黒ウサギも黙って受け入れませんが、初対面
でいきなり黒ウサギのステキ耳を引っこ抜きにかかるとはどういう見ですか！」

「好奇心のなせる技。」

「黙らっしゃい！」

まったく反省の色を見せない耀に、怒鳴り散らす黒ウサギ。そのせいで、再び背後か
ら近づく脅威に気がつけなかった。

「へえ……。このウサ耳って本物なのか。」

ガシツ！と黒ウサギのウサ耳を掴む十六夜。

「なら、私はコツチ。」

十六夜が掴んだのと逆の耳を掴む飛鳥。

「えーち、ちよつと待って——」

フギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

その日、森に黒ウサギの悲鳴が響き渡った。

ちなみに、アインスはというと

(ヴィータがいたら、喜んで引つ張っていただろうな……。)

と、ここにはいない家族のことを考えていた。黒ウサギはアインスに助けてほしいそう

な目で見ていたが、アインスはまったく気が付かなかった。

アインスは、若干天然だった。

「あ、ありえないのですよ。まさか自己紹介して箱庭の説明に入るまでに30分もかかってしまうなんて……。学級崩壊とはきつとこのようなことをいうに違いありません……。」

「いいから、とつとと話せ。」

あれから30分、しばらくして黒ウサギの助けに気がついたアインスの協力もあり、ようやく箱庭の説明が始まろうとしていた。問題児たちは、なかなか黒ウサギ弄りをやめなかったが、アインスが根気よく止めたこともあり渋々黒ウサギを開放した。これが

某「管理局の白い魔王」だった場合、三回ほど注意してもやめなかった時点で「少し：頭冷やそうか・・・。」と情け容赦無くディバインバスターを叩き込んでいるが、アインスはそこまで非道ではないのだ。

「さあ、いきますよ。定例文でいきますよ。ようこそ！箱庭の世界へ！」
そう言つて、黒ウサギは箱庭についての説明を始めた。

黒ウサギ説明中

黒ウサギが話した内容をアインスが自分なりにまとめると、次のようなものだった。

・箱庭には、様々な修羅神仏が住んでいる。

・この場にいる四人はタダの人間ではなく（アインスは人間ですらないが）、「ギフト」という特殊な力を持っている。

・この箱庭は、ギフトをつかつて行われる「ギフトゲーム」の言わば巨大な舞台だということ。

・箱庭にいる以上、どこかのコミュニティに所属しなければいけないこと。

・ギフトゲームには、様々な物（金銭、土地、人材、ギフトe t s）を賭けて行い、そこに法律は存在しない。（盗みはダメだが、ギフトゲームで勝てばOK）

・ギフトゲームは両者の同意により行われる。

かなり大雑把だが、大体こんなものだろうと、アインスは考えた。途中のコミュニケーションの所属についての話のとき、十六夜が「イヤだね。」と言ったのに対し、黒ウサギが激反応したため何かあるのではないかと思っただが、それよりも重要なことがあったので、アインスはスルーした。

アインスが気になっていたのは、今の自分の状態についてだ。アインスは闇の書の防衛プログラムを完全に消滅させるために自らの死を選んだはずだ。しかし、今こうして生きているということは、防衛プログラムもまた消えていないのではないかと考えたのだ。アインスは並列思考^{マルチタスク}を習得しているので、黒ウサギの説明を聞きながらずっと調べていたのだ。

(どういうことだ？防衛プログラムの存在を感じるのに、バグがすべてなくなっている……?)

その結果、アインスが出した結論は「防衛プログラムはあるが、自分の中にあつたバグがすべてなくなっている」だった。これは、アインスにとつて嬉しい誤算だった。もし、防衛プログラムがなかったらアインスの実力は大幅に下がっていただろう。何せ夜天の書が闇の書として恐れられてきたのは、防衛プログラムによるところが大きい。その防衛プログラムがなくなってしまうたら、アインスの弱体化は避けられなかっただろ

う。逆に残っていても、バグがそのままだったなら、暴走の危険があるためアインスはすぐさま自分の命を絶つだろう。ゆえに、今のアインスの状態は「本来の力を完全に発揮できる状態」というわけだ。

「さて、残りの説明については私たちのコミュニティでゆっくりお話ししたいのですが・・・よろしいでしょうか？」

アインスがここまで自己分析を終わらせたところで、黒ウサギの説明も終わったようだ。

「さてよ。俺がまだ質問してないだろ。」

これで説明を終えようとした黒ウサギに十六夜が待ったをかける。

「・・・どのような質問ですか？ルールですか？ゲームそのものですか？」

「そんなものはどうでもいい、腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ？俺が聞きてえことはただ一つ。」

ここで十六夜は一度言葉を切り、

「この世界は面白いのか？」

続きを口にした。その言葉に、飛鳥と耀も黒ウサギの返答を待つ。アインスは知らないことだが、三人がもらった手紙には、こう記されていた。

「家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い」

この言葉に見合ったものがあるのかという、十六夜の、いや三人の質問に黒ウサギは、
「——YES。ギフトゲームは必ずや皆さんのご期待に添えるものであること
をお約束します♪」

そう言って、満面の笑みを浮かべるのだった。

不屈の心

「それじゃ、俺はちよつくら世界の果てを見てくるぜ♪」

「……は？」

黒ウサギの説明が終わり、彼女のコミュニティに移動する途中、突然十六夜がそんなことを言い出した。

「あらそう。気をつけてね。」

「……おみやげ期待してる。」

「いや、止めないのか？私がおかしいのか？」

十六夜の発言に対し、止めるどころかお土産すら求める飛鳥と耀。アインスは一瞬自分が間違っているのではないかと思うが、すぐに気を取り直す。一般常識に少し疎いところがあるアインスだが、さすがにこれは三人が特殊なだけだと気づいた。

「おう。んじゃ、行ってくるぜ。」

「ちよつと待て……って、もういないのか!？」

さそつく出発しようとする十六夜を止めようとするアインスだが、すでに十六夜はその場にいなかった。先ほどの黒ウサギの説明で彼もまた、何かしらのギフトを持ってい

ることはわかっていたが、いくらなんでも早すぎだ。すでに視認ができなくなった十六夜を探すため、アインスは広域探索魔法を使用した。それですぐに十六夜の反応をキャッチするが、十六夜は信じられないスピードで移動していた。

（まさか、魔法を一切使わずにこれほどのスピードを出せるとは……。通常時のテストタロツサ並み……。いや、下手したらそれすら上回る速さじゃないか！）

闇の書だったころも含め、これまでアインスが見てきた魔導師のうち、フェイト・テスタロツサ程のスピードで動ける者は、数えるほどしかいなかった。そんな彼女のスピードに匹敵する速さで移動する十六夜はたいしたものだろう。さすがに、「ブリッツァクション」や「ソニックフォーム」ほどではないが十分早いし、これが十六夜の本気だとも限らない。

そうこうしているうちにも、十六夜はすごい速度で遠ざかっている。ちなみに黒ウサギは新しい人材が来たことがうれしくて浮かれながら歩いているため、十六夜がいけないことに気づいていない。

「このままでは探知範囲の外に出てしまうか……。仕方ないな。」飛鳥、耀。私は十六夜を連れ戻しに行く。黒ウサギにはなるべく早く帰ると言っておいてくれ。」

黒ウサギに状況を説明しようか迷ったが、今はその時間すら惜しいと判断し、二人に言付けを頼んで十六夜を追いかけるため最大速度で追いかけていった。

・・・黒ウサギ達のコミュニティの場所も知らないのに、どうやって帰ってくるのだろうか。

飛鳥と耀はふと、そんなことを考えた。

箱庭に着いたとき、そこにはダボダボなコートを着た少年が待っていた。

「ジン坊ちゃーん！新しいコミュニティのメンバーを連れてきたのですよー！」

「お疲れ様、黒ウサギ。そちらの女性二人が？」

「はい！こちらのご四人様が・・・」

ジンと呼ばれた少年の問いに嬉しそうに答えながら、後ろを振り向く黒ウサギ。

カチンと固まる黒ウサギ。

「あ、あれ？あとお二人いらつしやいませんでしたか？いかにも凶暴そうで「俺問題児！」っていう感じの不良のような殿方と、銀髪で黒ウサギの苦勞をわかつてくれそうな、綺麗な女性が？」

「ああ、十六夜君なら「ちよつと世界の果てを見てくるぜ♪」と行って、むこうのほうに走って行つたわ。」

あつちのほうにと飛鳥が指を指すのは、来る途中にあつた断崖絶壁だった。

「な、何で止めてくれなかつたのですか！」

「止めてくれるなよといわれたもの。」

それどころか、普通に送り出していた。

「な、何で黒ウサギに教えてくれなかつたのですか！」

「黒ウサギには言うなよって言われたから。」

「じ、じゃあアインスさんはどこに言つたのですか！」

「彼女なら「十六夜を連れ戻すから黒ウサギに言つといてくれ」って言って、十六夜君を追いかけていったわ。」

「それこそなんで黒ウサギに教えてくれなかつたのですか！」

「だつて今はじめて聞かれたし。」

「嘘です、絶対嘘です！十六夜さんとアインスさんがいない理由はともかく、私に教え

なかったのはお二人がめんどくさかったただけでしょう！」

「うん。」

まったく反省していない二人の返答にガツクリとうなだれる黒ウサギ。するとジンが顔を少し青くして慌てだした。

「ま、不味いです！今、世界の果てには強力な幻獣が！ギフトゲームを挑まれたら大変なこと！」

「あら、じゃあ二人はここで脱落？」

「ゲーム前にゲームオーバー、・・・斬新？」

「冗談言っている場合ではありません！」

あまり危機感を持っていない二人とは対照的に大慌ての黒ウサギ。

「ハアア・・・仕方ありません。ジン坊ちゃん、お二人を任せてもよろしいですか？」

「いいけど・・・黒ウサギはどうするの？」

「私はお二人を連れ戻しに行つてまいります。特に十六夜さんには・・・」

そう言つて、黒ウサギの青みがかつた黒髪が緋色に変わる。

「「箱庭の貴族」と呼ばれた黒ウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります！」

そして黒ウサギは世界の果てへ駆け出していった。

「一刻ほどで戻ります。お二人は箱庭の世界を満喫して行ってください！」
そうして黒ウサギは一気にトップスピードになり、二人を追いかけた。

「無事でいてください、お二人様。」

出発して約一時間、黒ウサギはまだまだにアインス達に追いつけていなかった。途中でユニコーンにあつていたがそのとき、世界の果てのほうで巨大な水しぶきが上がったのを目撃した。もしかした、世界の果てで幻獣とギフトゲームになっているのかもしれない。そう考えると黒ウサギはサーアと血の気が引いていくのを感じた。いくら二人がギフトを所持しているとはいえ、幻獣相手ではひとたまりもないと思っっているからだ。

ようやく黒ウサギが世界の果て、「トリトニスの大滝」についたとき、そこには川辺に立つ十六夜とそこから少し後方に立っているアインスがいた。

「ようやく追いついたのですよ、お二人様！」

「ん、黒ウサギか？ いやしかし、髪の色が先ほどと違うが……本当に黒ウサギか？」
「そ、そうですね！ たしかに髪の色は変わっていますが、真正銘本物の黒ウサギです！」

黒ウサギに気づいて話しかけてきたアインスだったが、髪の色から別人ではないかと少し疑うアインス。髪の色が変わったくらいで見分けがつかなくなるのかと少し悲しくなった黒ウサギ。そこでようやく十六夜が黒ウサギの存在に気がついた。

「お。オマエ黒ウサギか？ どうしたんだその髪の色？ イメチェンか？」

「そんなことどうでもいいのですよ！ 一体どこまで来てるんですか!？」

「世界の果てまで来てるんですよと、そう怒るなよ黒ウサギ。にしても、もう俺たちに追いついて来たのか。」

「む。黒ウサギは「箱庭の貴族」と呼ばれているのですよ。一刻もあれば追いつくなんて余裕で……!？」

(この黒ウサギが、一刻の間追いつかなかった?)

黒ウサギは驚愕した。いくら気づいたのが箱庭にいた後だといっても、黒ウサギの速さは相当なものだ。世界の果てまで、わずか一刻ほどで着いたことがそれを物語っている。にもかかわらず、二人に追いつけなかったということは、二人のスピードが相当

なものだということだ。

「ま、まあそれはいいのです。水神様にギフトゲームを挑んでいたらどうしようかと
「水神つてあれのことか？」・・・え？」

ザバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ン！

『まだだ、まだ試練は終わっていないぞ小僧！』

突如、川の中から現れたのは、巨大な蛇だった。

「じ、蛇神!? どうやったたら蛇神をここまで怒らせられるのですか!」

「なんか偉そうに『試練を選べ』とか言ってきたから俺を試せるかどうか試したんだ
よ。ま、結果は残念なやつだったが。」

なんでもないように答える十六夜に、唾然となる黒ウサギ。そこにアインスが声をか
ける。

「すまない、黒ウサギ。私が追いついたときにはすでに始まっていて止められなかつ
た。すぐに十六夜をつれて帰るつもりだったのだが・・・。」

そう申し訳なさそうに話すアインスに、黒ウサギは（やっぱアインスさんは、常識
人なのですね・・・）と心の中でホロリと涙した。ちなみにアインスは問題児でないだ
けで、常識に関していえばどちらかというと疎いのだが黒ウサギはそこまで気がつか

ギ。……え？」

黒ウサギの問いに答えたアインスの声音は、一切の不安を感じさせない強いものだった。

アインスは今の十六夜の姿を、いや、十六夜の目を自分の知るある人物と重ねていた。相手がどのような敵だろうと関係ない。格上だろうと格下だろうと自分のもてる力のすべてを出して相手に挑む。そこに自分の敗北を考えない、何が何でも勝つという闘志。その目は、後に「エース・オブ・エース」と呼ばれる少女——高町なのはに酷似していた。

きつと、10人に聞けば10人が似ていないという二人だろう。でも今、この瞬間の十六夜の目は不屈の心を持った彼女高町なのはの目に酷似していたのだ。

だから、アインスは十六夜が負けるなんて微塵も思わなかった。不屈の心を持った者の強さはアインス自身が身をもって知っているのだから。

「ハッ、しやらくせ！」

そして、そんなアインスの期待に答えるように、十六夜はその腕の一振りですまじく渦を霧散させた。

『バ、バカな!?!』

「嘘っ!?!」

蛇神と黒ウサギの驚きの声を重ねる。その隙に、十六夜は蛇神に急接近し、蛇神が気が付いたときにはすでに目の前で跳躍していた。

「ま、中々楽しめたぜ、オマエ。」

呆然とする蛇神に十六夜は蹴りを叩き込む。蛇神は吹っ飛んでいきそのまま気絶してしまった。

「チツ、今日はよく濡れる日だ。クリーニング代ぐらい出るんだろうな、黒ウサギ?」
十六夜がそう問いかけてくるが、黒ウサギの耳には入ってこなかった。

(人間が神格を倒した・・・!こんなことが・・・!)

黒ウサギは彼らを呼び出す際、召喚のためのギフトを渡した。主催者^{ホスト}の言葉を思い出していた。

『彼らは間違いなく、人類最高のギフト保持者たちよ。』

(この力があれば、黒ウサギ達の夢も現実・・・!)

だが、黒ウサギは知らない。自分が呼んだ三人よりも最強で最凶の力をアインスが秘めていることに・・・。

ウサギの願い、夜天の祝福

——世界の果て、トリトニスの大滝。

そこで黒ウサギは歓喜に打ち震えていた。彼らなら、きつと自分たちの夢を叶えてくれると思ったからだ。だが、そのせいで注意力散漫になっていた黒ウサギは、自分に迫る魔の手に気が付かなかった。

「おーい、何ぼさつとしてんだ黒ウサギ？胸とか足とか揉むぞー。」

「え……って、キヤアアアアアアアアアアアアアアアア!？」

気が付いたら黒ウサギの脇の下からニユツと十六夜の手が伸びていた。慌てて十六夜から距離をとった黒ウサギは、自分の体を抱えながら十六夜を睨む。

「何をするんですか！黒ウサギが200年守ってきた貞操を傷つけるおつもりですか！」

「200年守った貞操？うわ、超傷つけてえ。」

「お馬鹿様?! いや、お馬鹿様!!」

ウガー!と威嚇してくる黒ウサギに対し、十六夜は頭をかきながら諦めたように溜息を吐く。

どうやら二人はアインスが自分を卑下したことに、納得がいかないようだった。二人から見てアインスはかなり魅力的な女性に写っている。スタイル良し、性格良しで、10人に聞けば9人が綺麗と答えるだろう。ちなみに、後の1人は特殊な性癖の持ち主だ。

アインスからしてみれば、今まで闇の書だったころには憎悪の感情で見られることが多く、そのような邪な感情を向けられたことは皆無だった。歴代の主たちもアインスのことは道具としてしか見ていなかったもので、アインスは決して自分が魅力的な女性ではないと思っている。何回か八神はやてのセクハラを受けはしたが、スキンシップの延長だと思っていた。

「(いくら考えても埒があかないな。) おし、黒ウサギとつとあの蛇神からギフトもらつてこい。」

「(そうですね。) はい!ご本人を倒したのできつとすごいものがもらえますよ!」
そういうと黒ウサギは蛇神の方へ向かっていった。蛇神はすでに目が覚めていたようで、黒ウサギと一言、二言かわすと、何かを黒ウサギに渡した。両手に何かを抱えて帰ってきた黒ウサギは、今にも踊りだしそうな雰囲気ですその手に持ったものを見せてきた。

「ウツキヤアアア! 見てください、十六夜さん、アインスさん! こんな立派な水樹の

苗をいただいちゃいました！これがあればもう他のコミュニティから水を買うことも、わざわざ遠くの川まで水を汲みにいなくても済みます！」

あまりの嬉しさにその場でクルクル回り始めた黒ウサギとは対照的に、十六夜は少し冷めた目で黒ウサギを見ていた。黒ウサギは嬉しさのあまり、そんな十六夜の様子に気づかなかつた。

「なあ、黒ウサギ。一つ聞きたいことがあるんだが？」

「はい、今はとつても機嫌がいいのでどんな質問にも 答えちゃうのですよ。」

「なら黒ウサギ—— オマエ、何か決定的なこと隠してるだろ？」

ピシリ！と先ほどまではしやいでいた黒ウサギが固まった。頬は引きつり、冷汗は止まることなく流れ続けた。

「な、何のことですか？黒ウサギには何のことかさっぱり——」

「じゃあ聞くが、なんでオマエは俺たちを呼び出す必要があつた？」

何とか言い逃れようとする黒ウサギを、十六夜はさらに問い詰める。

「そ、それは説明のときにも申し上げたとおり、皆様にオモシロオカシク過ごしていただこうと——」

「いや、それだけではないのだろう？」

黒ウサギにそう問いかけたのは十六夜ではなくアインスだった。黒ウサギの説明中

に自己分析を行っていたアインスだが、話自体はマルチタスクで聞いていて、黒ウサギの異変に気が付いていたのだ。

「十六夜がコミュニティに入るのを拒絶したとき、黒ウサギは怒っていただろうか？もし彼らを呼び出した理由が黒ウサギの言っていた通りなら、入るコミュニティは決して黒ウサギ達のコミュニティでなければいけないわけではないはずだ。なのにあの反応では、まるで十六夜たちが黒ウサギのコミュニティに入らなかったとき困るのは黒ウサギ達の方《・・》のように感じたんだが？」

「・・・・・・・・」

アインスの言葉に何も言い返せない黒ウサギに、十六夜が更なる追い打ちをかける。

「沈黙は是なりだぜ、黒ウサギ。俺もアインスの意見には全面的に賛成だ。——

—黒ウサギ、オマエはなんでそこまで必死になっている？」

「・・・・・・・・」

「何か言えよ、黒ウサギ。それとも何か？このまま他のコミュニティに行っちゃってもいいの？」

「一、ま、待つてくださいい！」

黒ウサギはようやくやく声を出した。その声は大きいながらも、泣き出してしまいそうな

声だった。

「ほら、待ってやってるだろ？ いいからとつとと話せ。」

「・・・話せば協力していただけますか？」

「面白ければな。」

そう言つて、十六夜は近くの岩に腰かけ話を聞く体制になった。黒ウサギは不安だった。十六夜にはぜひ自分たちのコミュニティに入つて欲しいが、どのような話をすれば十六夜に面白く感じてもらえるかわからなかった。なにせ、今から話す内容はかなり暗い話だ。それを面白く話せなければ十六夜は他に行つてしまふという。どうすれば、と考え込む黒ウサギの肩にそつと手が置かれた。振り向くとそこには、こちらを見て少し微笑んでいるアインスの姿があつた。

「大丈夫だ、黒ウサギ。」

「アインスさん？」

「私はこれでも人を見る目には、少しばかり自信がある。十六夜だつてそこまで悪い奴じゃない。だから黒ウサギは、いつも通りにしていればいいんだ。」

長い時間、闇の書の管理人格として存在していたため、アインスは人の感情、特に憎悪や悪意といった負の感情に非常に敏感になっている。黒ウサギには確かに打算があつたのだろう。しかし、黒ウサギからは悪意などの感情を一切感じなかつた。むしろ

ろ、何か期待するような希望に満ちた感情を感じた。だから、黒ウサギが何か隠していることに気づいていながらスルーしていたのだ。もし、十六夜が聞かなければ、アインは聞くことはなかっただろう。

黒ウサギはふと肩の荷が下りた気がした。考えてみれば当たり前なのだ。ほんの数時間前に会った人が何を面白いと感じるかなんてわかるはずなのだ。わからないなら後は自分らしく行くしかない。それが、今自分にできる全力なのだから。

「コホン。それでは僭越ながらこの黒ウサギが今の私たちのコミュニティの状況を、なるべくオモシロオカシクご説明いたします！」

そうして黒ウサギは語りだす。自分が十六夜たち三人を呼んだわけを、自分たちの状況を。

黒ウサギ説明中

黒ウサギの説明から彼女たちがかなり崖っぷちな状況にいることが分かった。

この箱庭には、「魔王」と呼ばれる存在がいる。魔王は「主催者権限」というものを恵用し、他のコミュニティに無理矢理ギフトゲームを挑むという、いわゆる天災のような存在である。魔王のゲームは拒否できず、負ければ多くのものを失うという。黒ウサギ達のコミュニティも、かつては「東区最大のコミュニティ」と言われていたが、魔王とのゲームに敗れ、「名」と「旗印」——地球という国名と国旗を奪われ、コミュニティの主力メンバーも大半が奪われてしまいコミュニティの存続に必要なものはすべて失ってしまった「ノーネーム」というものになってしまったという。残ったのは魔王との戦いにより荒廃した領土と120人近くの子供たち、そして宝物庫にあるという強力すぎて黒ウサギでないところかということもできない大量のギフトだけだった。コミュニティを解散して新しく作れば楽なのだが、黒ウサギ達は仲間の帰ってくる場所を守るためコミュニティの復興といういばらの道を歩き出した。そのために黒ウサギ達は異世界から新しいメンバーを集めるため、十六夜、飛鳥、耀の三人を呼びだした。そのため、アインスはおそらく召喚の際何らかの理由で巻き込まれてしまったのではないかということだった。

話を聞いてから十六夜はずっと黙ったままだった。黒ウサギは十六夜に向けてずつと頭を下げている。およそ三分ほどたったところ、ようやく十六夜が声を出す。

「……イイな、それ。」

「・・・は？」

「は？じゃねえよ。協力してやるってんだ。もつと喜べ、黒ウサギ。」

「え、え？今のつてそんな流れでしたっけ？」

「そんな流れだったんだ。それとも俺の力は必要ないか？」

「いえ、そんなことは！十六夜さんの力は私たちには必要です！」

「素直でよろしい。それと——」

そこで十六夜はアインスの方を向く。

「お前はとうするんだ？黒ウサギの話じゃ、オマエはこのコミュニティに入る義理も理由もねえだろ？」

確かにその通りだ。アインスが呼び出されたのが単なる事故なら協力する必要はないし、むしろ元の世界に帰れるよう黒ウサギに問い詰めてもいいはずだ。ならばアインスが出す答えはたった一つしかない。

「黒ウサギ」

「は、はい！」

「そこまで緊張しないでくれ。今日から同じコミュニティの仲間になるのだからな。」

「そ、それじゃあ！」

「ああ、黒ウサギ達に協力しよう。」

黒ウサギ達に協力する。それがアインスの出した答えだった。

「本当によろしいんですか？」

「元の世界に未練がないといえれば嘘になるが、すでにけじめはつけてあるし、あのような話をした相手を見捨てるほど落ちぶれたつもりもない。——第一、私は一度消えた身だしな。」

最後の言葉は、黒ウサギ達に聞こえないように言った。黒ウサギ達を助けたいと思つたのは嘘ではないが、バグが直つたとはいえ未練がましく戻るのは自分を送り出してくれたすべての人に申し訳が立たないと感じたことも理由だった。

「ありがとうございます！……これからよろしくなですよ、アインスさん、十六夜さん！」

「こちらこそよろしくな、黒ウサギ。」

「ま、呼び出してくれた恩返し程度には働いてやるよ。」

そうして、アインスたちは一度世界の果を見てから箱庭に向かつていった。その時、黒ウサギの顔はとてもしそう満面の笑みだったという。

「ふ、フォレス・ガロとギフトゲームをするー！ー！ー!?」

箱庭についたアインスたちを待っていたのは、「私たち、明日「フォレス・ガロ」とギフトゲームするから。」という飛鳥の一言だった。

先ほどまでの元気はどこえやら。その場にはあまりの衝撃に真っ白に燃え尽きた黒ウサギ（白）がいた・・・。

千の瞳と、白き夜叉

黒ウサギがあまりのことで真つ白に燃え尽きてしまい役に立たないので、アインスが代わりに話を聞くとこのような内容だった。

飛鳥、耀、ジンの三人は箱庭のカフェに入る。

←
雑談していたらコミュニティ「フォレス・ガロ」のリーダー、ガルド・ガスパーが襲来。

←
ガルドがジンのコミュニティの状況を教える。

←
ガルドが飛鳥と耀を勧誘するが二人は拒否。

←
飛鳥が自身のギフトでガルドを尋問。

←
ガルドは子供を誘拐し、その子供を殺していた。

飛鳥たち激怒。

←
なら、ギフトゲームで決着をつけよう。

←
黒ウサギたち帰還。

←
黒ウサギ燃え尽きる。 ↑イマココ

何か恐ろしいぐらい端折ったが、それはいい。いや多分よくないが所詮は過程である。ここで重要なのはギフトゲームをするという結果である。よりにもよってまだ召喚されて一日目にかかわらず、早くもギフトゲームを挑んだのだ、この二人は。本来止めるべきであるジンも乗り気だった。アインスからすれば、ガルドが許せないのはわかるがうかつすぎる。様々な戦場を見てきたアインスが思うに、ガルドは典型的小物だ。自身はトラのくせにやっていることは完全に「虎の威を借る狐」だ。ゆえに飛鳥と耀でも十分に勝てるだろう。しかし彼女たちは商品だけ決めて、ゲーム内容をまったく考えていなかったのだ。これではガルドが自分に有利なゲームができる。特にジンはもともと箱庭に住んでいたのだから、ルールについて指摘するべきだったのだ。それをしな

かったということは、彼もガルドに勝てると安心——いや慢心しているのだろう。飛鳥たちがいれば勝てると。それがまさに、ガルドと同じ「虎の威を借る狐」だと思わずに。彼はリーダーとしての責任感是十分だがそれだけだ。実力と思考がまったく備わっていない。これはコミユニティ復興は至難の業だろうと、アインスは思った。

飛鳥と耀の二人は、むしろいいハンデだと思っているらしいがやはり甘い。ガルドは確かに小物だが、そういう小物だからこそ追い詰められたとき何をしてかすかわからないと、アインスは経験で知っていた。魔導炉を暴走させて敵味方関係なく道連れにしようとしたり、よくわからない生体兵器を無差別にばらまいたり、今まで見た中にろくなものはない。

また、十六夜は手を貸すつもりはなく、飛鳥も十六夜の助けを借りるつもりはない。十六夜曰く「これはコイツらが売って、アイツらが買った喧嘩だ。俺が手を出すのは無粋ってもんだぜ」らしい。アインスも黒ウサギも互いに協力して欲しかったが、三人が聞くと思えず諦めたのだった。

あれからしばらくして黒ウサギが復活、ジンと別れた一行は「サウザントアイズ」というコミュニティに向かっていた。黒ウサギはサウザントアイズにギフト鑑定を依頼しようとしたのだ。それを聞いて、問題児たちはすこしばつの悪そうな顔を、アインスは自分の力を理解しているので特に反応しなかった。

道中黒ウサギは飛鳥たちにコミュニティのことを黙っていたことを謝ったが、彼女は特に気にしていないようだった。耀が「毎日お風呂に入りたい」と言ったとき、十六夜がとってきた水樹のおかげで入れると聞いたとき、耀は十六夜に親指をグツ！と立ててサムズアップし、十六夜も同じくサムズアップで返していた。そういえば、十六夜が世界の果へ行くとき、耀は十六夜にお土産を希望していたはずだ。そう考えると、十六夜がとってきた水樹は、十分なお土産になったのだろう。

さて、サウザントアイズに向かう黒ウサギ達だったが、ふと飛鳥が道のわきに咲く桃色の花を見て疑問を口にした。

「桜の木……ではないわね。今は夏真っ盛りだし。」

「まだ初夏に入ったばかりかだろ？ 気合のある桜が残っていても不思議じゃねえ。」

「・・・今は秋だったと思うけど？」

「春に入ったところだから、桜が咲いてなければむしろおかしいだろう？」

ん？とお互いの話がかみ合わないことに四人は首を傾げ、黒ウサギは苦笑しながらも説明する。

「皆様は、それぞれ違う世界から呼び出されています。季節のほかに歴史も所々違っているはずなのですよ？」

「へえ。パラレルワールドってやつか？」

「いや、おそらく立体交差並行世界論の方だろう。」

そうだろうか？とアインスが黒ウサギに聞けば、彼女は少しばかり驚いているようだった。

「確かに、その通りです。アインスさんはそういうのお詳しいんですか？」

「たまたま知り合いにそういう研究をしていた人がいてそれで知っていただけさ。」

その知り合いというのは、歴代の闇の書の主たちのことだ。アインスのいた世界では、今でこそ次元間の移動が可能になっているが、古代ベルカ時代ではなかった技術だ。そのため多次元世界について研究していた主は意外と多く、その過程で聞いたことがあるだけだった。

そうこうしているうちに、サウザントアイズについたようだった。店の前では、割烹着を着た店員らしき女性が暖簾をしまっていた。もうすぐ閉店時間なのだろう。

「ま——」

「待ったなしです。サウザントアイズは時間外の営業はやっていません。」

「いつそすがすがしいくらいに、バツサリと切り捨てられた。」

「なんて商売つ気がない店なのかしら。」

「その通りです！閉店時間の5分前に締め出すなんて・・・」

「文句ならいくらでも。あなたたちは今後出禁です。」

「出禁!?このくらいで出禁とかお客様なめすぎなのですよ!」

「少し落ち着け黒ウサギ。こんな時間に来た私たちにだつて否があるだろう?」

「た、確かにそうですが・・・」

「そちらも、いくらか無礼を働いてしまったようで、すまなかつた。」

「・・・まあ、今回はあなたに免じて不問といたしましょう。」

黒ウサギと店員は口論を繰り返していた（黒ウサギが一方的に言われてただけ）が、アインスの仲裁により双方とも矛を収めた。

「それで、一応聞くがやはり入ることはできないのか?」

「ええ、そもそもうちはノーネームお断りですので。このあたりで「箱庭の貴族」がい

中身はエロオヤジというどこぞの名探偵っぽい感じなのだ。

「い、いい加減、離れてください！」

そういつて黒ウサギは、白夜叉を掴んで、思いつきり投げつけた。飛んでいった方向には十六夜がおり、足で受け止めようとしたが、その前に空中で白夜叉の動きが止まった。十六夜が蹴ろうとしたのに気が付いたアインスが「バインド」を使って白夜叉の動きを止めたのだ。

「な、なんじゃ、これは？」

「バインド」という捕縛魔法です。本来は相手の動きを封じる魔法ですが、このような使い方もできます。」

「おお、そうか。いやー助かった。礼を言うぞ。」

「いえ、お礼を言われるほどでは。」

「礼として、おんしのその黒ウサギに負けず劣らず、むしろ勝っているその胸を揉んでやろうか？」

それは一体誰に対する礼なのだろうか？少なくとも、アインスに対する礼ではない。

「うう……、まさか黒ウサギまで濡れることになるうとは……。」

「因果応報かな？」

どうやら黒ウサギが帰ってきたようだ。そこで飛鳥が口を開く。

「あなたはこのお店の人？」

「おお、そうじゃ。わしはサウザントアイズ幹部の白夜叉じゃ。依頼ならおぬしのその發育のいい胸を触らしてくれたら引き受けよう。」

「オーナー、それでは売り上げが伸びません。ボスが怒ります。」

ふざける白夜叉に、それを咎める店員。十六夜は白夜叉を見て感想を口にする。

「へえ……。幹部つてこの和装ロリがか？」

「初対面の相手をいきなりロリ扱いか。何様だ、おぬしは？」

「十六夜様だけ。以後よろしくな和装ロリ？」

「じゃから、その和装ロリをやめい！」

はたから見ると、高校生に食って掛かる少女にしか見えないので、何とも微笑ましい光景である。

「十六夜、彼女は見た目はともかく、年齢はおそらくここにいる誰よりも年上だぞ。」
とわいえ、このままでは埒が明かないので、アインスが止めに入る。アインスの言葉に白夜叉は少し驚いたようだ。

「おんし、わかるのか？」

「細かい年齢まではわからないが、ある程度なら家族にあなたに似た者がいるからな。

——それに、あなたが多くの戦場を戦い抜いてきたことも。」

「ククク、そうか。」

アインスの言葉に愉快そうに笑う白夜叉。アインスの言っていた家族とは「鉄槌の騎士ヴィータ」のことである。彼女もまた、見た目は幼いながらも、生きてきた時間は相当なものだ。だからアインスは、白夜叉が見た目通りの年齢でないことがわかったし、それにより、長年の戦場での経験から、白夜叉が相当な強者であることにも気が付いた。

「あの、お二人とも？そろそろよろしいでしょうか。」

いつの間にか、アインスと白夜叉の二人だけで話していたため、他のみんなをほったらかしにしまっていた。

「おお、そうでじゃったな。おんしたちは、何か用があつたのじゃったな。いやー、すまんすまん。お詫びと言つたらあれじゃが、店に上がつて行け。」

「よいのですか？規定ではノーネームの入店は禁止と・・・」

「よいよ。すべてわしが責任を取るからの。ほれ、おんしたちも突つ立ってないで上がるよよい。」

そういつて、白夜叉はアインスたちを、サウザントアイズに招き入れた。

白夜と夜天

アインスタちは現在、とある一室で白夜叉の対面に座っていた。

「あいにくと店は閉めてしまったのでな。わしの私室で勘弁してくれ。」

アインスタちの前に座っていた白夜叉が、そう切り出してきた。

「あらためて自己紹介しておこうかの。わしは三三四外門に本拠を構える「サウザントアイズ」の幹部の白夜叉だ。黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニティが崩壊した今でも、ちよくちよく手を貸しておる器の大きな美少女だと認識しておいてくれ。」

「はいはい、ホントにお世話になってるのですよー。」

白夜叉の言葉に、すつごく投げやり気味に返す黒ウサギ。まあ、先ほどのやり取りを見れば、世話になるのと同じくらい迷惑をこうむっているのだろう。

ここで耀が、先ほどの白夜叉の発言について挙手をした。

「外門、つて何？」

「箱庭の階層を表す外壁に作られた門のことですよ。数字が小さいほど都市の中心に近く、それに比例してより強力な者たちが住んでいるのです。」

耀の疑問に答えたのは黒ウサギだった。白夜叉は、箱庭の地図を取り出し四人に見せ

た。

「・・・超巨大タマネギ？」

「いえ、これはバームクーヘンでしょう？」

「そうだな、どちらかと言えばバームクーヘンだな。」

「そうか、これが「ばーむくーへん」というものなのだな。」

「「「「えっ？」」」」

「ん、どうした？」

アインスの発言に、他五人の思考が一瞬停止した。そして開かれるアイコンタクト会議。

(ま、まさかバームクーヘンを知らないとは思ってなかったのですよ。)

(そうね、むやみに外出できなかつた私ですら知ってたのに。)

(あやつの見た目はどう若く見積もっても10代後半じゃろ？それで見たことがないとは・・・)

(そーいやアイツ、世界の果てでも自分が魅力的じゃない発言してたな。)

(あの見た目で？・・・胸なんか爆発しちゃえばいいのに(ボソツ))

((お、ちよつと待て落ち着け。))

この間わずか一秒半、中々にカオスな会話である。アインスが闇の書から解放された

のが12月24日、消滅したのが4月のはじめ頃なので、アインスが向こうで活動していたのはおよそ3か月と半月ほど。その間にも、「闇の欠片事件」や「砕けえぬ闇事件」などがあった。(アインスは未来から来たメンバーを覚えている。おそらく召喚される前に一度消滅しようとしたため、自身にかかっていた記憶封鎖が解除された為だと思われる。)そのため、アインスが日常生活を送っていた期間はさらに短い。だから、アインスは現代の一般知識にかなり疎い。むろん基本的なことはすべて記憶しているが、バームクーヘンは聞いたことはあっても、実際に見たことはないようだ。

アインスの出自を知らない5人から少しかわいそうな子を見る視線を受けて、アインスは可愛く首をかしげるのだった。

それは唐突で、そして必然的な出来事だった。

「アインスショック(仮)」の後、外門の説明に戻った白夜叉が、黒ウサギが持つ水樹

の入手法を聞いたとき、十六夜がぶつとぼしたと説明された。それに驚いていろいろ考察する白夜叉に、十六夜がああ蛇神と知り合いだっただのか尋ね、その白夜叉が答えはあの蛇神に神格を渡したのは自分だといった。すると十六夜は獰猛な笑みを浮かべ白夜叉にあの蛇神より強いのか聞いた。そして白夜叉はいった。

——自分フロアマスターは東側の「階層支配者」であり、東側四桁の外門以下でなら「最強の主権者」だと。

この言葉に問題児三人が反応しないわけがなかった。十六夜、飛鳥、耀の三人は白夜叉にギフトゲームを挑んだ。黒ウサギは三人を止めようとしたが、三人は聞く耳を持たなかった。黒ウサギはアインスの方を見るが、アインスは手を貸そうとはしなかった。アインスにはわかっていたので。このまま挑んでも三人は絶対勝てないことに。三人の言葉を受けた白夜叉は、懐からカードを一枚取り出すと、三人に尋ねた。

「おんしらが望むのは「挑戦」か？それとも対等な「決闘」か？」
そして、世界が変わった。

そこは、水平に太陽が回る広大な雪原——白夜の世界だった。

白夜叉が行ったのは、転移なんて言う生易しいものではない。一つの世界を作ったというのを、初めて見る面々も理解できた。

「今一度お前たちに問おう。わしは「白き夜の魔王」——太陽と白夜をつかさどる星霊、白夜叉。おんしらが選ぶのは試練への「挑戦」か？はたまた対等な「決闘」か？」

白夜叉の凄味のあるセリフに、挑んだ三人は瞬時に理解した。「絶対に勝てない」と。それほどまでに、白夜叉の迫力とはとてもないものだった。

そして、アインスは少し拍子抜けしていた。「この程度か」と。無論、これは白夜叉を見下しているわけではない。白夜叉が放つ威圧感と、力が不平等なのだ。威圧感は確かに凄いが、感じる力はいしたことはない。まるで、「本来の力を封じているアインス」と同じように……。

白夜と夜天^{アインス}。二人はいわば、対極に位置する存在だ。ゆえに、互いの力を完全に把握できる。夜を太陽が照らすように、太陽が沈み夜が来るように。互いが互いを天敵として認識しているからこそ、相手の力量を把握できる。おそらく白夜叉も、アインスが本

気を出せないことに気が付いているのだろう。二人は、性格はともかく、お互いが保有する力に關しては絶対に相容れない存在なのだ。もし、二人が全力で戦えば、箱庭の東区は更地に帰るだろう。太陽と夜、二つ反発戦はそれほどの力なのだ。そしてそれは、弱体化している今でも大して変わらない。少なくとも、今いる世界は崩壊するだろう。もつともアインスには、白夜叉と決闘するつもりはないので、そのようなことにはならないが。

白夜叉の圧倒的なまでの威圧感を前にして、さすがの十六夜たちも挑戦を選んだ。ただ、素直に挑戦を受けるのは己のプライドが許さなかつたようので、「試されてやる」というおそらく彼らの最大限の譲歩の言葉だつたが。

三人が挑戦を選んだことに、アインスはホツとした。一応、彼らが決闘は選ばないと思っていたから止めなかつたが、もし、万が一にでも彼らが決闘を選んでいたらどうしようかと思つていた。あれほどの威圧感を出されたのだ。それで立ち向かう者なんて――元祖、不屈の心を持つた白高町魔王様なのはや、強い相手との戦いが好きな戦バトル闘狂ジャンキーの烈火シグナムの将や、なのはとシグナムを足して2で割つたような性格の星光シユテル・デストラクタの殲滅者や、威圧感に気づけるかも怪しい雷刃レウイ・スラッシュヤーの襲撃者や……。以外に自分の知り合いに決闘挑みそうなのがいて、アインスは頭を抱えた。

試練を選んだ三人に知り夜叉が用意したゲームは、グリフォンに自身の「知恵」、「力」、「勇氣」のいずれかを認めさせることだった。

このルール——というか、グリフォンを見たときから、耀は興味心身でゲームも彼女が行うこととなった。彼女は自分のギフトを使い、グリフォンと言葉を交わし、グリフォンの誇りをかけた勝負を提案した。内容は、耀がグリフォンにまたがり、湖畔を一周する間に、耀を振り落としたらグリフォンの、落ちなかつたら耀のかちというものだった。そして、グリフォンの誇りの対価として、耀は迷うことなく「私の命を賭けます。」と言い切った。黒ウサギと飛鳥は止めようとしたが、十六夜と白夜叉、そしてほかならぬ耀自身がそれを拒んだ。アインスは、耀の覚悟に満ちた瞳を見たときから止めるつもりはなかった。

そして行われたギフトゲーム。勝ったのは——
耀だった。

皆が見守る中、耀は見事グリフォンにしがみついてみせた。ゴール直後、グリフォン

から耀が落下するというアクシデントがあったが、耀はなんと、グリフオンのように空を踏みしめて歩いて見せた。十六夜は、耀のギフトが「生物の特徴を取得する」ものだと感じていたため、ほかのものに比べ、驚きは少なかったようだが、耀は今の力を「友達になった証」といった。耀のギフトは父親が作ったという木彫りで、それを見た白夜又がすごく驚いた顔をし、耀から買い取ろうとしたが、即答で拒否された。

ここで、黒ウサギがここへ来た本来の目的を思い出した。

「そういえば、今日は皆さんのギフト鑑定をお願いしに来たんでした！」

「よ、よりにもよってギフト鑑定か。専門外どころか無関係もいとこなんじゃが……。とわいえ、主催者としてゲームに勝ったおんしらには何か与えんとな……。よし、ちと贅沢な代物じゃが、コミュニティ復興の前祝にはちようどよかろう。」

そう言つて、白夜又は柏手を一つ打つ。すると、アインズたち四人の前にそれぞれカードが一枚ずつあらわれた。

コバルトブルーのカードには逆廻十六夜、ギフトネーム「コードアンソウン正体不明」。

ワインレッドのカードには久遠飛鳥、ギフトネーム「威光」。

パールエメラルドのカードには春日部耀、ギフトネーム「ゲノムツリ生命の目録」、「ノーフォーマー」。

「マー」。

ブラックのカードにはリインフォース・アインズ、ギフトネーム「ナハトヴァール夜天の守護神」。

四人の持つカードを見て黒ウサギが声を上げる。

「ギフトカード!」

「お中元?」

「お歳暮?」

「お年玉?」

「ち、違います!ギフトカードは、顕現しているギフトを中に収納することができるんです。耀さんの「生命の目録」や、十六夜さんがとってきた水樹なんかも収納可能で、いつでも取り出し可能な超高価なものなんです!」

「つまり、素敵アイテムってことでOKか?」

「そんな適当な……あーもう!そうです、超素敵アイテムです!」

半ば投げやりぎみに答えた黒ウサギ。そんな黒ウサギをしり目に、アインスは自身のギフトカードを見つめていた。

夜天の守護神、ナハトヴァールとは、言い得て妙だと思った。元々、ナハトヴァールは防衛プログラム。「守る」という意味では決して外れてはいない。最も、防衛プログラムのときのナハトヴァールはとも守護神とは言いがたい存在だったが。

——もしもこのとき、自分のギフトネームについて詳しく調べていたら、わかったかもしれない。

自分のギフトネームに隠された、力の意味を・・・。

魔王の爪痕※アインスの設定説明あり

白夜叉と別れたアインスたちは、ノーネームのコミュニティへと向かっていた。

「ここから先が、わがコミュニティの敷地になります。ですが、魔王との戦いの爪痕が残っておりますので、覚悟してください。」

どうやら、コミュニティに到着したようだ。黒ウサギは、コミュニティの敷地に入る前に、四人に確認をとる。

「いいぜ。魔王様の実力がどんなもんか見てみたい。」

「そうね、これから私たちが戦う存在のことを知っておくのも悪くないわね。」

十六夜は嬉々として答えるが、飛鳥は少し声音に棘がある気がした。黙っているが、耀も少し機嫌が悪そうだ。

実は、二人はサウザントアイズから帰るとき白夜叉に、「おんしたちは魔王と戦えば確実に死ぬ」と言われたのだ。十六夜とアインスはともかく、二人は今のままでは絶対に生き残れないと。その言葉は二人のプライドを思いつきり傷つけたが、あれほどの実力者である白夜叉の言葉だ。二人は何も反論できなかつた。それでも、やはりプライドの高い二人はその事実を認めつつ、認めたくないという、矛盾した気持ちを持っていた。

——白夜又は確かにすごい。しかし、すべての魔王が白夜又レベルなわけがないのではないか？

そんな二人の、儂き希望は早々に打ち砕かれた。

門の向こうは、廃墟だった。そうとしか言いようがなかった。草木は枯れ果て、建造物は軒並み腐っていた。そう、壊れていたのではなく、腐っていた。

「……なあ、黒ウサギ。魔王との戦いがあつたのは、今から何百年前の話だ？」
「……三年前でございませう。」

黒ウサギの言葉にアインスは驚愕した。ここまで腐り、風化しきつた街並みが、たった三年で作られたことに。いや、これが魔王の仕業なら、三年かけて風化させたのではなく、三年前に風化したのだろう。

ありえない。それが、アインスが感じたことだった。古代ベルカの戦場をいくつも見てきた。闇の書として幾多の世界を滅ぼしてきた。そんな彼女ですら、そう感じた。それほどもでにこの場所は、元凶である魔王はありえないのだ。もし、自分がすべての封印を解いて、全力で戦っても勝てないかもしれないほどの存在。

それこそが箱庭の災厄、「魔王」。

これは、いつまでも自分の力から逃げるわけにはいかなそうだと、アインスは一人闘志を燃やしていた。

「ノーネーム」本拠、大浴場。

ノーネームの女性陣はお風呂に入っていた。

あの後、本拠に移動した一行は、そこでジンと二十人ほどの子供たちに出迎えられた。この子供たちは年長組と呼ばれ、このコミユニテイにいる120人の子供のうち、10歳を超えた少年少女たちだ。最初こそその溢れる元気に押され気味だった四人だが、慣れてくると、アインスは普通に子供たちと接していた。何せ、彼女の主であるはやてやその友人たちは、今目の前にいる子供たちとほとんど同じ年。はやてたちは少し精神年齢が高かったが、それでもやはり子供は子供。接し方は知っていた。それに、レヴィに比べればいくばくかマシというものだ。

年長組は水路の掃除をしていたらしく、すぐに水を流せる状態だった。十六夜が手に入れた水樹を設置し、水路に水が流れ出したことにより、コミユニテイの水問題が解消

し、さっそくお風呂に入る流れとなった。しかし、大浴場を見た黒ウサギは顔面蒼白となり「少しお待ちください！」という大浴場に入ってしまった。おそらく、全く使つてなかつたので、とても汚れていたのだろう。黒ウサギは1時間ほどで掃除を終わらせ、十六夜が先を譲つたので、今は女性陣が入っているのだ。

十六夜は「二番風呂が好きだからな」と言っていたが、おそらく、先ほどからアインスの探索魔法に引つかかっている反応を調べに行つたのだろうとアインスが考えていた。

——ちなみに、アインスの魔法には「洗淨魔法」というものがあり、掃除など一瞬で終わらせられるのだが、アインスは完全に忘れていた。戦場では全く役に立たない魔法なので久しく使っていなかつたのだ。それを後から聞いた黒ウサギは、orzの状態で落ち込んでいた。

今、大浴場ではガールズトークという名の自分たちのいた世界の話が行われていた。黒ウサギ達からしてみれば、自分たちの知らないことを知って、親睦を深めようとしているのだろうか、アインスはあまり気乗りしなかつた。(表情には出さなかつたが)自分が知っていることなんて、戦場での戦いや、歴代の闇の書の主についてのことばかり。主はやてとの思い出も、わずか三か月半のみ。あまり、話せることはないのだ。

——アインスは怖かつた。自分が過去にしてきたことを黒ウサギ達に知られ

てしまったら、どうなるのかが。すでにアインスは、ノーネームが好きになっていた。だから嫌われるのが、拒絶されるのが怖いのだ。かつての自分なら気にしなかっただろう。でも、人の温かさを知った今ではもうだめだ。アインスは、また孤独に戻るのが怖かった。

結局、アインスはお風呂を上がった後もそのことについて、何も話さなかった。いつかは話すつもりだが、今はまだ、この温かさを感じていたいと願った。外にあった反応はすべて消えていたし、何も心配することはない。明日は飛鳥たちのギフトゲームだし、参加しなくても応援に行くつもりなので、もう寝てしまおう。そうしてアインスはベッドの中で眠りについた。

名前 : リインフォース・アインス

容姿、身体的特徴 : 原作（GOD編時）と同じ

ギフトネーム : 夜天ナハトの守護神ヴァール

備考 : 本作の主人公。冷静沈着な性格で、初対面だと少し冷たい印象を受ける。しかし、接してみると人当たりもよく、とても優しいのですぐに誤解は解ける。一応ノーネーム内では常識人とされているが（基本的に問題行動を起こさないため）、一般常識に少し疎いので、たまにとんでもないことをしでかす。要するに、天然である。本人は人間ではなく、夜天の書の完成人格、すなわちプログラムである。そのため異性をあまり気にしない傾向がある。それとあまり前に出る性格でもないもので、問題児たちといると影が薄くなるが、実力は現ノーネーム最強であり、白夜叉と互角。（ただし、互いに本気ではなく、あくまで通常時のときなので、実際はまだわからない）

彼女は一度消滅しているが、なぜか復活、箱庭にやってきた。その際に防衛プログラムが正常に戻りいぶかしむが、特に何も困らないので放置している。しかし、真相は簡

単であり、消滅した際、一緒にバグが消えただけ。(簡単に言うと、「パソコンがバグったから、リセットして再起動したら直った」とほぼ同じ現象。ただ、消滅が箱庭に来たせいで、中途半端に消滅して運よく正常な防衛プログラムだけが残った。また同じ理由で記憶封鎖も解けており、GODにおける未来組やマテリアたちも覚えている。

魔法について：完全状態の防衛プログラムによる無尽蔵な魔力、蒐集してきた多くの魔法、そして戦場で培ってきた技術と経験があわさることで、かなりのチートになっている。とはいえ、普段は力がある程度封印しているので、そこまで強くない。(それでも、魔力オーバーSSSSランクで白夜叉と互角だが)

アインスが現在使える魔法

1. 八神はやて(夜天の書)の全魔法
2. 守護騎士たちの全魔法、およびデバイス作成
3. マテリアルたちの全魔法、およびデバイス作成
4. ユーリ・エーベルヴァインの魔法の一部
5. GOD編終了までの高町なのは、およびフェイト・テストロッサの全魔法
6. その他GOD編に出てきた魔法の劣化版
7. 聖王の鎧(笑)

解説：1は言わずもがな。

2と3は、元々守護騎士たちも、マテリアルたちも夜天の書の一部なので当然その情報も入っているので使える。デバイス作成も同様。

4も上とほぼ同じだが、ユーリ自身が防衛プログラムより強いので完全には使えない。威力を抑えれば大体使えるが、それでも魄翼の再現ができない。

5は蒐集しているしそれ以降も何度か戦っているため習得している。なお、マテリアルのデバイスを応用して使うことができる。

6は蒐集していないが、効果と見た目からプログラムを作り、再現して使う。そのため、本物と少し違う部分が見受けられる。なお、アマタとキリエの物は、そもそも魔法ではないので使えない。

7はかつて聖王オリヴィエがいた時代の闇の書の主が再現しようとして失敗したもの。一応、鎧のように展開できるが、ぶっちゃけ再現したセイグリッド・ディフェンダーの方が固い。本来の聖王の鎧並みの強度を得るには、片腕の肘より先のみを展開すればいいが、片手だしアインスは広域殲滅が得意なので、全く役に立たない。いつか出番が来る・・・と思う。

王の資格

翌日、ノーネーム一行は、フォレス・ガロとのギフトゲームのため移動していた。

「あ、昨日のお客さんじゃないですか！これからギフトゲームですか？」

話しかけてきたのは昨日、飛鳥たちが立ち寄った「六本傷」の旗印を掲げるカフェの、猫耳尻尾の店員だった。アインスは猫耳を見るとリーゼ姉妹を思い出す。そのため少し猫が苦手だったりする。

閑話休題。

「でも、気をつけてくださいいよ。アイツ、舞台区画じゃなくて、居住区でギフトゲームをするつもりみたいですから。」

「居住区ですって!?!」

猫耳店員の言葉に、黒ウサギは驚愕する。そんな彼女に飛鳥が聞く。

「舞台区画とは何かしら?」

「舞台区画はギフトゲームを開催するための区画になります。ですが、ガルドはそこではなく、居住区でギフトゲームを開くつもりらしいのです。」

それは確かにおかしな話だ。ギフトゲームを行う場所があるなら、そこですればいい

ものを、わざわざ居住区でやろうとしているのだ。

猫耳店員と別れた一行は、一抹の不安を抱えながらもフォレス・ガロへ向かっていった。

フォレス・ガロの居住区に着いた一行だったが、居住区はとてつもない状態になっていた。木がうつそうと生い茂り、ジャングルのようになっていた。ジャングルの中で木に絡まれながらも点在している家の姿に、ここがもともとこんな場所ではなかったことがわかる。

「なあ、黒ウサギ。ここは本当に居住区なのか？人がいる気配がしないのだが・・・。」
「そ、そのはずです。でも、こんなに木は生えてなつかたはず。それに・・・。」

黒ウサギは、近くの木によるとしばらく黙っていたが、何か確信したように言葉を発

した。

「やっぱり、鬼化している。」

「鬼化？それはいったいどういったものなんだ？」

「鬼化と言うのは、簡単に言えば吸血鬼によつて与えられる恩恵^{ギフト}で、これを使うとこの木のように禍々しい姿に変わり、その力も強力になります。」

「それではガルドは、吸血鬼のギフトを所持していたということかしら？」

アインスの言葉に返答した黒ウサギに、飛鳥が尋ねる。黒ウサギは飛鳥の問いに首を横に振った。

「そのようなことはないはずですよ。ガルドはただのワータイガーのはず。このようなギフトは持つていなかったはずですよ。」

「なら、これは一体……。」

「何、簡単な話じゃねーか。」

戸惑う彼女たちに、十六夜が声をかける。

「つまり、ガルドにこの鬼化のギフトを渡した第三者がいるんだよ。」

「でも、なぜそんなことを？」

「さあな、そこまではわからん。まあ、第三者に何らかのメリットがあるから、与えたんだろ。」

「考えても埒が明かないわね。ま、あの外道を倒すことは変わらないのだし、考えるだけ無駄ね。」

相手が出所不明のギフトを所持しているにも関わらず、飛鳥は余裕そうだ。

「み、皆さん！この契約書類を見てください！」

一人、契約書類ギアスロールを見つけたジンが、他のメンバーを呼ぶ。その声からは、すごい焦りを感じ、顔も青ざめていることから、よほどのことなのだろう。残りのメンバーも契約書類を読んでいき、黒ウサギが驚きの声をあげる。

「ガルド自身の命を条件に・・・指定武器で打倒!？」、これはマズいのですよー」

「このルールって、そんなにマズいものなの？」

「はい。これは恩恵ギフトではなく契約ギアスによって身を守っている為、飛鳥さんのギフトで動きを止めることも、耀さんのギフトで傷つけることもできなくなっているのですよ！」

「僕の落ち度でした。僕がちゃんとルールを決めていれば・・・。」

ジンはこの時、ようやく自分の過ちに気が付いた。あの時、ガルドへの怒りの感情に気を取られ、最も大事なゲームのルールまで頭が回らなかった。その代償が、アインスの予想通り、今になってやってきたのだ。口惜しさのあまり、唇を噛み、顔をうつむける。そんな彼へ飛鳥が声をかける。

「気にしなくていいわ、ジン君。むしろ、これぐらいがいいハンデよ。」

「うん、絶対に負けないから大丈夫。」

飛鳥に続き、耀も言う。だが、それでもジンの顔は晴れない。そんなジンにアインスは、

「今のお前は、コミュニティのリーダーにふさわしくない。」

そう、言い切った。ジンはその言葉にさらにうつむく。

「ちよつと、アインスさん！何もそんなこと言わなくても。」

「少し黙っていてくれないか、黒ウサギ。」

黒ウサギがジンをかばおうとするが、アインスは一言で一蹴した。その声は今まで聞いてきたアインスの声より、かなり冷たいものだった。

「いいか、ジン。君はコミュニティを国にたとえたとき、王にあたる存在だ。つまり私たちは、君の臣下だということだ。王である君は臣下を導かなければならない。なのに何故、君は私たちより早く後悔し、絶望している。そのような王に臣下はついてこないぞ。少なくとも私はそうだ。」

アインスの言葉に、ジンは何も言えず聞いている。

「王というのは、常に臣下たちと共にいるものなんだ。臣下と共に考え、臣下と共に戦い、そして笑いあう。それが最高の王と呼ばれる者だ。王の立場である君は、私たちを信じていてくれればそれでいいんだ。私たちは必ず、その期待に答えよう。」

「でも、皆さんがこちらに來たのは僕たちが呼んだからで、その僕が何もせずにいるなんて……。」

「それがまちつがっているんだ。」

「え？」

ジンは顔をあげる。そこには優しく微笑むアインスがいた。それは、慈愛に満ちた女神のような微笑みだった。

「確かに、このような場面では君は役立たずかもしれない。しかし、必ずしも、王が強くなければいけないわけじゃない。人には、できることと、できないことがある。君はまだ自分にできることが見つからないだけだ。それはこれから見つけていけばいいものだ。」

「見つかるでしょうか、僕なんかに？」

「見つかるさ。私が箱庭に來る前につかえていた王は、ただの女の子だった。それでも、素晴らしい王になった。それに、私たちだっている。もし、どうしようもなくなったら、私たちに頼ってくれ。一人ですべてができる者などいないのだから。私たちは君を見捨てたりしないさ。」

「その通りなのですよ！黒ウサギはいつだって、ジン坊ちゃんの味方です！」

「ええ、少なくとも私たちがここに居るのはあなたたちのおかげなのだから、感謝して

るのよ?。」

「うん、ありがとう、ジン君。」

「今のオマエはまだまだだが、もう少しマシになったら考えてやるよ。」

「みんな・・・。」

ジンは涙が込み上げてきた。まだまだ未熟な自分だが、そんな自分でも信じてくれる人がいることが嬉しかった。ジンはアインスに向かって頭を下げた。

「すいません、アインスさん。ご迷惑かけてしまつて。」

「何、気にすることはないさ。私こそ少し出過ぎた真似をしてしまった。」

「そんなことはないですよ。むしろ感謝しています。」

そういつて、顔をあげたジンの顔にはもう、先ほどまでの不安の色はなかった。

「僕、目指してみようと思います。このコミュニティにふさわしいリーダーを。」

「そうか。なら、私から言うことはない。期待しているぞ、リーダー?。」

「はいっ!。」

自信をもってそう宣言するジンに、アインスは満足げにうなずいた。その後、ジンは十六夜と少し話してから、飛鳥たちとともに、ギフトゲームへと向かつていった。

ジンたちがギフトゲームを開始して幾ばくか過ぎたころ、十六夜は暇をもてはやしていた。

「なあ、黒ウサギ。今からゲームを見に行っちゃ駄目なのか？箱庭の貴族とそのお付っことで。」

「黒ウサギの耳は箱庭の中枢につながっています。その為、ここからでもゲームの様子はわかりますので、事前に取り決めがない限り無理ですね。」

「ハアー……箱庭の貴種さん、マジつかえねー。」

「せめて黒ウサギに聞こえないように言ってください！傷つきますから！」
ため息を吐き、あからさまにがっかりしている十六夜に、黒ウサギが悲痛な叫びを返す。それを適当に聞き流し、アインスに声をかける。

「なあ、アインス。暇つぶしがてら、今から俺と勝負しねえか？」

「こんなときに何を言ってるんだ、おまえは。」

「だって、箱庭の貴族（笑）じゃ、ゲームの様子が見れないし「何ですか、（笑）って!?!」うるさい、黙れ黒ウサギ。「ヒドイ!?!」お嬢様たちがゲームしてんのに、何もしないのが退屈だからな。」

それに、と言葉を続ける十六夜。

「——白夜叉が認めるオマエの実力が見てみたい。」

昨日、白夜叉は飛鳥と耀の二人に魔王と戦うには力不足といった。

そう、「二人に」だ。

それはつまり、十六夜とアインスは、魔王と戦っても大丈夫だと白夜叉が認めたに他ならない。十六夜は蛇神を素手で叩きのめしたことから、実力があると認められたのだろう。だが、アインスは違う。誰もアインスが戦っているところを見たことはない。それどころか、アインスが箱庭で使用したギフトは、空を飛ぶ能力と「バインド」という名の捕縛魔法のみ。空飛ぶ能力もおそらく魔法だろうから、飛行魔法か。ともかく、アインスは、いまだ一度も攻撃系の能力を使っていない。サポートに特化している可能性もあるが、その場合白夜叉が認めるとは、思いづらい。最悪でも、魔王から自分を自衛できる程度の力がなければ認めないだろう。それに、白夜叉ほどの相手が、見ただけで大丈夫と判断したということは、まさしくアインスのことを「強者」として見ているということ。そんな相手に、十六夜が勝負を挑むのは当然といえた。

アインスはしばらく考えたが、

「いや、やめておこう。」

そういつて断った。十六夜は少し挑発するように言う。

「どうした、逃げんのか？」

「そういうわけではない。ただ、ここで戦うと余計に黒ウサギに迷惑をかけてしまうからな。」

「ううう、黒ウサギの苦勞をわかってくださるのは、アインスさんだけなのですよ！」

黒ウサギは泣きながら、アインスに抱き付く。そんな黒ウサギの頭をアインスは、よしと撫でる。美人のアインスに頭を撫でられながら、抱き付き泣き続ける美少女の黒ウサギ。この光景を見て、十六夜が「お、これはこれでありだな。」と小さくつぶやいたのは、完全な余談だろう。

さて、アインスが十六夜の申し出を受けなかったのには、もう一つ理由がある。アインスが張っている広域探索魔法に、自分たち以外の反応があるからだ。今のところ敵意を感じないので放置しているが、もし、十六夜と戦えばだいたい派手な戦いになるだろう。それに乘じて何か行動されても、対処に困る。ゆえに、アインスはいつでも動けるように準備をしていた。

結局、その反応はギフトゲームが終わるまで、何の動きも見せず、ゲームが終わった直後、どこかへ行ってしまった。

「皆さん、ここっちです！」

ゲームが終わり、参加者の三人に合流するため移動していたアインスタたちが見つけたのは、負傷し血を流している耀と、その傍で必死に止血をしているジン、そして少し肩で息をしている飛鳥だった。

「黒ウサギ、早く耀さんをコミュニティの工房へ！そこでなら治療ができるはず！」
「わ、わかったのですよ！」

黒ウサギに的確な指示をだすジン。おそらく止血している間にも、ずっと対処を考えていたのだろう。それができるだけでもジンは確かに成長しているのだろう。

耀を抱えて移動しようとする黒ウサギをアインスが止める。

「少し待て、黒ウサギ。」

「ちよ、アインスさん!?!今は一刻も早く耀さんを……。」

「わかっているから言っているんだ。」

そういつて、アインスは耀に向けて手をかざした。

「来い、クラールヴィント。」

アインスの両手の人差し指と中指に指輪が現れる。それは金色の指輪で、緑の石がついた物と、青い石がついた物のペアでそれが片手ごとについている。

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで、『静かなる癒し』。」

アインスが詠唱を唱えると、クラールヴィントから緑色の魔力が放射状に放たれた。その魔力に触れた耀の傷が、みるみるうちに塞がっていった。

「す、すごいです!これほどまでの回復用のギフトがあるなんて……。」

「傷は塞いだだが、さすがに無くなった血液までは回復できない。後は任せても大丈夫か?。」

「はい、後はお任せください!。」

黒ウサギは耀を抱えてコミュニティへ全速力で帰って行った。

黒ウサギが帰って行ったあと、十六夜はジンを呼び何か話していた。それをアインス

が眺めていると近くに飛鳥が寄ってきた。

「飛鳥か。体の方は大丈夫か?」

「ええ、怪我もしていないし、少し疲れただけだから。それにさっきのあれ、春日部さんの傷だけではなく、私の体力も回復してくれたでしょう?」

「気づいていたのか?」

「あの、緑の光みたいのに触れたら、体の疲れが取れていったもの。さすがにわかるわよ。ありがとうね、アインスさん。」

「あれぐらい当然だ。気にすることはない。」

アインスと飛鳥が話していると、十六夜とジンの二人がガルドの傘下にいたコミュニティの旗印を、元のコミュニティの人たちに返していた。あの十六夜のことだ、何か考えがあるのだろうか。そうしてすべての旗印を返したジンは、その場にいた他のコミュニティの全員に聞こえるように言った。

「ジン＝ラッセルです。これから聞くことも多くなると思いますが、よろしくお願います!」

この宣言を聞いて、このコミュニティなら・・・、^{ジン}彼なら大丈夫だと、アインスは思うのだった。

名前を呼んで

フォレス・ガロとのギフトゲーム終了後、耀は彼女の自室のベッドで寝かされていた。アインスによつて怪我は完治していたが、無くなった血までは回復しなかった。ノーネームの宝物庫に保管されていた増血のギフトによつて、血を補給した彼女だが、いまだに目を覚まさない。

そんな彼女の横に、アインスは椅子に腰かけていた。もちろん看病のためだ。元々プログラムであり、多くの戦争を経験してきたアインスにとつて、一日二日の徹夜など苦にならない。ゆえに彼女は一晩中耀の看病をするつもりだった。

アインスがそこまでする理由は、耀が大切な仲間であるのもあるが、それ以上にアインスのとある記憶が関係していた。

自身がまだ闇の書だったとき、八神はやての家族が死んで彼女が一人ぼっちになつてしまったばかりのころのこと。彼女はいつも泣いていた。周りの大人たちには、いつも笑みを見せていた彼女は、いつも泣いていた。少女が一人で暮らすには大きすぎる家で、朝起きて誰もいない。夜寝るときも誰もいない。まるで、世界に自分しかいないような感覚。それが錯覚だとわかつていても泣くことを、恐怖することをやめられない

何があるのかわからないのだ。ノーネームで魔力を発しているのは黒ウサギのみ（黒ウサギの発しているものも少し違うが、魔力と近いのか感知できる）であり、わからない反応のうち、一つは魔力を発しておらず、もう一つは初めて感じる魔力（に近いもの）であった。

黒ウサギがいるのなら、よっぽどのことがない限り大丈夫だろうが、一応自分も行ってみようかとも思ったが、アインスは思いとどまった。

「う、うくん……」

先ほどの轟音と揺れで、耀が目を覚めたのだ。

「耀、体は大丈夫か？」

「……アインス？ここは……」

「ノーネームの本拠の耀の部屋だ。何があったか覚えているか」

「何って……あ」

耀は自分に何があったか思い出した。フォレス・ガロとのギフトゲーム、油断して大けがをしたこと、飛鳥にギフトゲームを託して気絶してしまったこと。

「ギフトゲームは……」

「ん、ああ、飛鳥がちゃんと決めてくれた。ノーネームの勝利だよ」

「そっか……」

安心したと同時に耀の体が震えていく。今になって感じたのだ、死の恐怖を。ゲーム最中は必死だから気が付かなかった。さっきまでは、頭がしっかり働いていなかったからだ。しかし、状況を整理して頭が働いてくると、あの時のことを思い出してしまったのだ。

迫る爪、引き裂かれる体、流れ出る血、冷たくなる体温。

あの時のことを思い出して、耀は恐怖で震えてしまっていた。でも耀はその恐怖を抑え込もうとした。そのとき耀が何を思っていたかは、アインスにはわからない。でも無理をしているのはわかった。

だから、アインスはそんな耀を抱きしめた。

「え？アインス何「いいんだ」を……、え？」

「あんな大けがをしたんだ。怖くなるのは当たり前。震えるのも仕方がない。むしろそれは、人として当たり前なことなんだ。だから、我慢しなくていいんだ」

「で、でも私……ノーネームの一員で、強くなくちやいけないのに、こんな……」
「だからといって、恐怖を我慢しなくていいんだ。むしろ、どんなに強くなっても恐怖を忘れるな。相手を殺し、殺されかける恐怖を忘れてしまつては、それは狂人と変わら
ない」

「……いいの？恐怖して、震えて、ない……て……」

「ああ、いくらでも泣いていい。私がここにいるから・」

「ア・・・アインス・・・。う・・・うわ~~~~~ん！」

恐怖を我慢していた耀だったが、アインスに諭されて泣いた。普段の彼女からは考えられないほどの声を出し、アインスに縋りつきながら泣いていた。

「怖かった・・・、死んじゃうのが・・・。箱庭に来てできた友達や、ノーネームのみんなに、もう二度と会えなくなるかもしれない・・・！」

「そうか。気にするなどは言わない。でもよく頑張ったな」

耀の泣き声は、しばらく止むことはなかった。

あれから十分ほどたった後、落ち着いた耀はさつきまでのことで、顔を真っ赤にしていた。

「あ、ありがとうアインス。おかげで少し楽になった」

「それはよかった」

「そ、それでね、さっきのことは誰にも言わないでほしい」

「別に、誰かに言いふらすつもりもなかったから構わないが・・・」

「うん、絶対に言わないで」

—— さっきのことが飛鳥や十六夜の耳に入ったら、私は確実に弄られる！

耀は先ほどとは違う恐怖を味わっていた。

そこで、泣き疲れたのか、耀を睡魔が襲う。

「ん、眠い・・・」

「体力はまだ回復しきってないだろうし、あれだけ泣けばな」

そう言っただけでアインスは立ち上がる。

「さて、もう一人で大丈夫なら、部屋に戻りたいんだが」

「うん、大丈夫だよ。ありがとう」

「そうか。なら、またあし「あ、ちよつと待って！」・・・、どうした、耀？」

アインスが尋ねると、耀が遠慮しがちに聞いてくる。

「えつとね、アインスさえよければなんだけど・・・私の友達になつてくれないかな？」

「友達？私がか？」

「うん。私は元々箱庭に友達作りに来たんだ。そして、飛鳥と同じようにアインスと

友達になりたいと思ったから……。ダメ……。かな……。?」

アインスは少し考えてみて、あることを思い出してみた。

「友達か……。それなら、私と耀はもう友達になっっているぞ?」

「え?」

「私だけじゃない。黒ウサギとも、十六夜とも、白夜叉とも、耀はもう友達なんだ」

「な、なんで……。」

耀はアインスがなぜこんなことを言ったのかわからなかった。アインスは少し苦笑しながら答えた。

「まあ、私も本人から直接聞いたわけではないんだが……。私の知り合いが言うには、友達になるのはとても簡単なんだそうだ」

「そうなの?」

「ああ、『名前を呼ぶ』それだけでもう友達になれるらしい」

「名前を呼ぶ……。」

それはかつて、フェイト・テストロッサが高町なのはに言われたこと。アインスは、フェイトを闇の書に取り込んだとき、その記憶からこの言葉を聞いていたのだ。

「そんなことで友達になれるなら苦労しないよ……。」

「そうか? 友達になりたくない人を、親しく名前を呼ぶことなんてないだろう?」

「・・・言われてみれば確かに」

耀は納得すると、アインスを見つめる。

「もう私には、たくさんの友達ができていたんだね」

「そうだな。まあ、友というのには目に見えないつながりです。慣れない人からすると、わからない者なんだろう」

「そっか・・・、ねえ、アインス？」

「ん、なんだ？」

「ううん、呼んでみただけ」

そう言って、嬉しそうに言うようにつられて、アインスも微笑む。

「耀。もう眠いのではなかったのか」

「うん・・・もう限界・・・」

「なら今度こそ、おやすみ、また明日」

「うん、おやすみ・・・ありがとう」

アインスが耀の部屋が出る。耀は目をつむり、睡魔に身を任せる。

—— 今日はいいい夢見れそうだな。

そう思いながら。